

狩猟・採集生活をしてきた旧石器人は、狩猟具としての打製石器を進化させていきましたが、縄文時代の直前に革新的な進化を遂げたとお話でした。それが細石刃と呼ばれるものです。それらは規格に沿っている小形の石器で、木や骨角製の柄に埋めこまれて、組み合わせ道具用替え刃として用いられました。石材以外の木や骨角はなくなってしまうため、当時の実用品を見ることは難しいようです。

復元したものや想像図を探して見つけたのが右の写真です。

解説記事などによると、それまでの狩猟具より貫通性能に優れるとあります。確かに、先端が皮膚に突き刺さればそれに続く黒曜石の鋭い刃が傷を押し広げ、ダメージを大きくしたのかもしれませんが。

この狩猟具は、刃こぼれすることを前提として作られています。そして、欠けた部分に新しい細石刃を埋め込むことで何度でも再生利用が可能でした。使うたびに刃こぼれすると書かれた記事もありますが、誇張されたものではないと思います。

使うたびに欠けてしまう細石刃は大量の替え刃を用意する必要がありましたが、それを支えたのが押圧剥離と呼ばれる技法です。押圧剥離技法とは、木や骨角の棒を対象に押しつけて、加えた圧力

によって石を割る技法のことであり、その考案は技術的にきわめて独創的といえます。豊成叶林遺跡を発掘した石器作り名人は道具を胸に当てて、黒曜石に加わる力の大きさと速度を微妙に調節して、細石刃を作り出したとのこと。当時の人も名人と同じ方法や、或いは二又の木などを複数組み合わせ、この原理で押圧調整をしたかも知れません。

押圧剥離技法はバイカル湖周辺でもっとも早く発生し、日本列島にも伝搬したようです。ただ、幾つかに大別される技法の中には伝搬ルートが曖昧で、日本列島で自生した可能性もあるそうです。人類発生の地から最遠の地にまで進出したチャレンジ精神も旺盛な列島の旧石器人ですから、創意工夫に長けていたのでしょう。

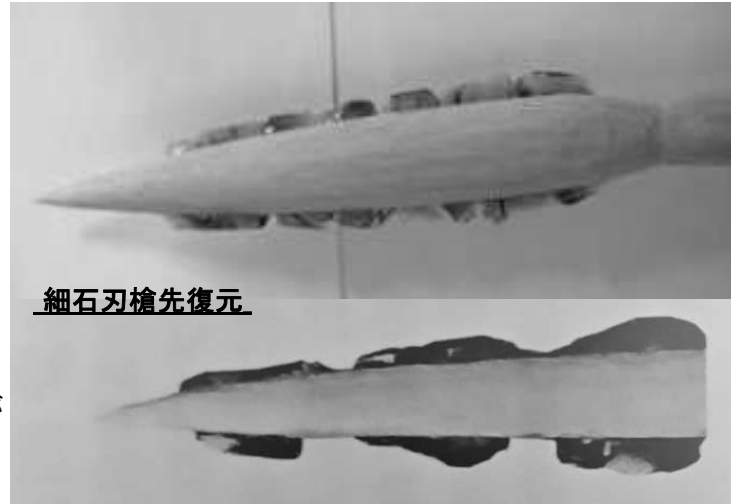
ところで、下の写真は細石刃が主流となる前に使われていた尖頭器と呼ばれる石器ですが、これと比べると細石刃の復元モデルは冴えなく見えてしまうのは、友人だけでしょうか。友人は仕事上、手作りで作った試作品に実用を想定して一部に力を加えてみると、力のかかり具合で固定部分が崩れたりする経験が多らしく、復元モデルも、細石刃が柄にしっかりと固定

できるのか疑わしく見えるようです。

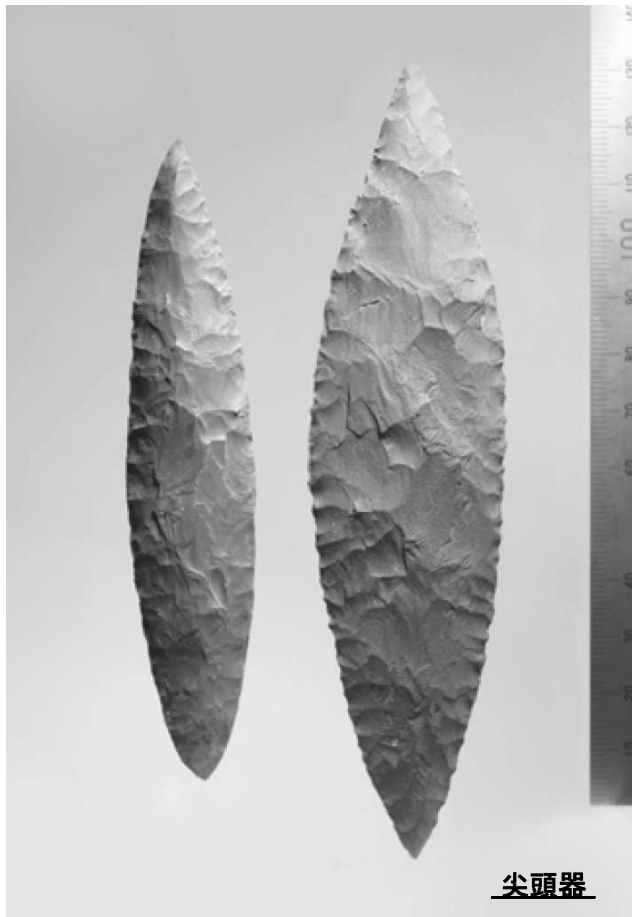
細石刃は渾身の力を込めて獲物に投げつけられ、獲物との接触の瞬間には、細石刃と柄の接合部にかかる力はあらゆる角度が想定されます。その力に耐えて、細石刃は獲物に致命傷を与えるようなことが可能なのでしょうか。細石刃と柄の接合部には、接着剤としてアスファルトが使われた痕跡もあるようですが、それでも外力に対してどのくらい安定的でしょうか。復元モデルの先端は木や骨であるため、丈夫な体毛に覆われた獣の皮膚に突き刺すことができたのでしょうか。

この狩猟具の別の特徴である軽いことが獲物の獲得に効果があったのかもしれませんが。狩りに出るとき細石刃の槍は軽いので、尖頭器の槍より多く本数を持ち歩けます。替え刃の細石刃も僅かな負担です。

黒曜石の細石刃の鋭利さを活かすには、突き刺すより獲物に掠めるように槍を当てた方が有効ではないでしょうか。襲撃で仕留められなかった獲物を、その時負わせた傷の血痕を辿り、再度襲撃します。この襲撃と追跡の繰り返しに武器の軽さは好都合です。追跡中に替え刃交換を行えば、襲撃は常に最大槍数で行えた可能性もあります。尖頭器の槍は、獲物に当たってこそ、その殺傷力がものを言いますが、外れて岩にでも当たれば使い物にならなくなります。それより再生された細石刃の槍で何度も襲撃する方が、狩りの成功率を高めたのではないのでしょうか。



細石刃槍先復元



尖頭器